

60398

教科書文庫

6
810
34-1989
20000 67193

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

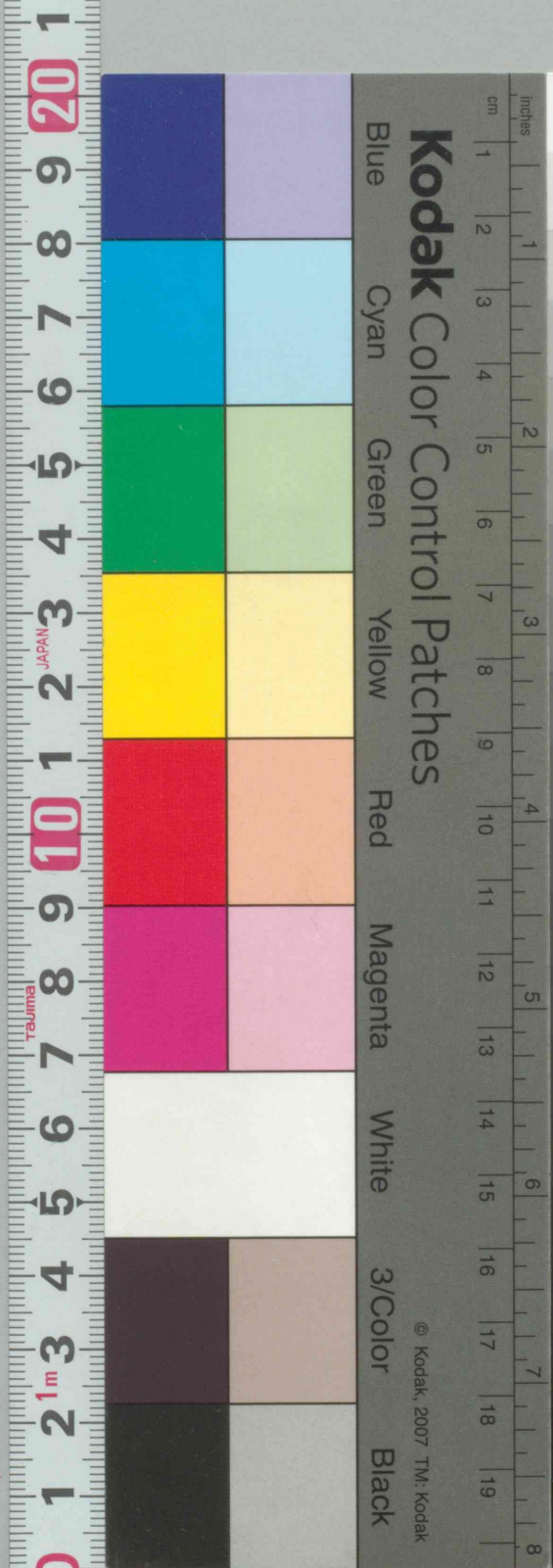


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3a
810
AB24

教科書

國語

第五学年 中



資 料 室

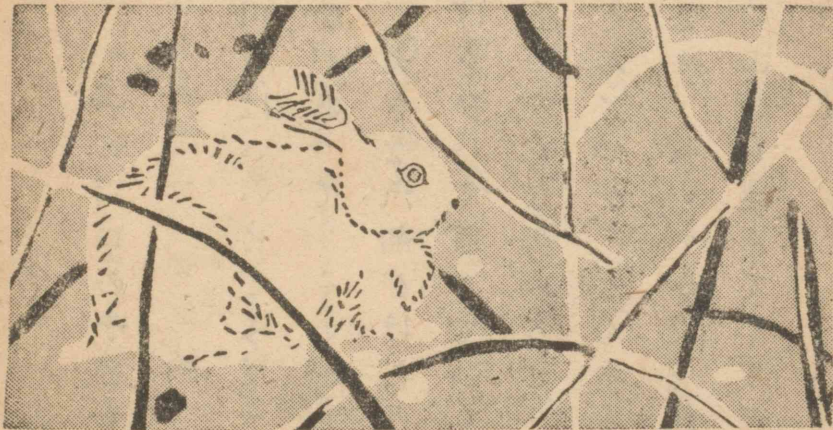
國

語

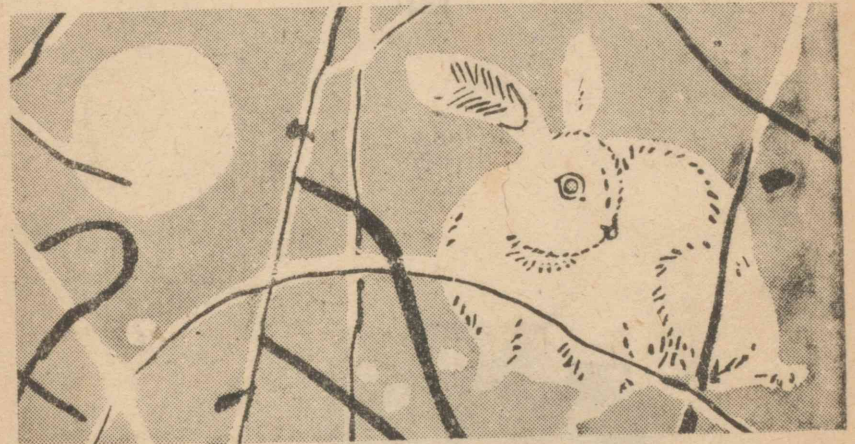


第五学年 中

32
810
BBZK



- 五 新しい出発……………四十三
 やりなおし
 じゃがいもをつくり
- 六 雨の中……………五十一
- 七 一つ一つづろ……………五十五
- 八 いいにくいことば……………五十八
- 九 父のかん病……………六十三



- もくろく
- 一 川口の子どもたち……………四
- 二 めいめいの歌……………十二
 おかのう
 唱歌
 おかあさま
- 三 二宮金次郎……………十八
- 四 田園……………三十

一 川口の子どもたち

川口はいいところだ。近くには小高いおかがあって、そこからおきをながめると、大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通っていくのがみえるし、川上の方をながめると、近くの町の工場のおんとつが、なん本も立っているのがみえる。長いいかだを組んで、材木を遠くの山から運んでくるのもみえる。

なによりおもしろいのは、大学のボート

トがいつもここで練習していることだ。

川口の子どもたちは、いつもすな原で、すもうをとったり、おにごっこをしたりして遊んでいるが、それにあきると、そのボートをながめては、いろいろな話をしあって楽しむ。きょうも、みんなは話に花をさかせている。ついせんだって、大学生にたのんで乗せてもらったうれしさで、まだむちゆうになつて

いるのである。

「ぼくは、大きくなったら、三ばんか四ばんをこぐんだ。カマかせに、長いオールをぐいぐいとこいでみたいな。」

「ぼくもきみに賛成だ。ぼくは、父にいたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。その体格で、思うぞんぶん、長いオールをこいだら、オールがぎゆうぎゆうとよなつて、船は、



ものすごいスピードで走るだろ
う。みるみるうちにあいてをぬ
いてしまう。それを思うと、ぼ
くはむねがわくわくする。
「ぼくは、パウがこぎたいな。い
つもは、いちばんびりにいるば
かりで、べつに用もないようだ
が、ボートの向きをかえたりひ
き返そうとしたりするときは、
きつとコックスが大声でいうだ
ろう。」

『パウ、バック一本。』

それでもきこえなければ、また
どなる。

『パウ、バック一本。』

ぼくが力をいれて、一本バック
をやると、ボートは向きをかえ
て、あぶないところからぬけだ
して、新しい方向に進んでいく。
ぼく、これがうれしんだよ。
「ぼくは、こぎかたがじょうずに
なって、みんながさせてくれた
ら、コックスのまえにすわって、
整調をやってみたいな。ぼくは



からだもいいし、息もつづく。コックスの号令どおりに、一糸みだれずこいでいくと、乗り組んでいる者が、みんなそろって、一つの生きものみたいに進んでいく。これこそ、いちばんりっぱなものだと思ふ。

「だがね、やっぱり、いちばんだいで、むずかしいのは、コックスだろ。さっきから、きみはだまってるけれど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。」

「ほんとうにきみのいうとおりだ。ぼくらですいせんしようよ。きみは、ぼくらの心持をよく知っている。ぼくらのはりきつているとき、ぼくらのつかれているとき、ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかっている。」

ただ、わかっているだけではなしに、いつもそのうえを考えていて、いいことをはつきりきめる。ぼくらは、きみについていきさえすれば、だいじょうぶだと思ふんだ。

「そういわれて、自信をもって、よしやろうということができたら、うれしい。けれども、ぼくにはなかなか、よしきたとはいえない。」

「おきを大きな船が通っていくよ。あれはどこへいく船だろ。」
「大きな船だね。きつと遠くへいくんだろ。」

「あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだろうね。」

「そりゃあ、船長のほうがむずかしいだろ。しかし、りっぱなコックスは、いつかりっぱな船長になるだろうよ。」

「じゃあ、りっぱな整調は、りっぱな運轉をする人になるだろ
うね。」

では、実力があつて、カいっぱいはたらくいい船員には、だ
れがなるのさ。」

「それはぼくたちだ、三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくたち
強い男の子だ。」

「さあというときに、ひとりて責任をしょつて立つ、パウをこ
ぐ人もいるだろ。」

「もちろんさ、そういう男には、ぼくがなることにきめてい
るのさ。」

船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本
の國全体だって、同じことだと思ふ。いいコックスが日本を

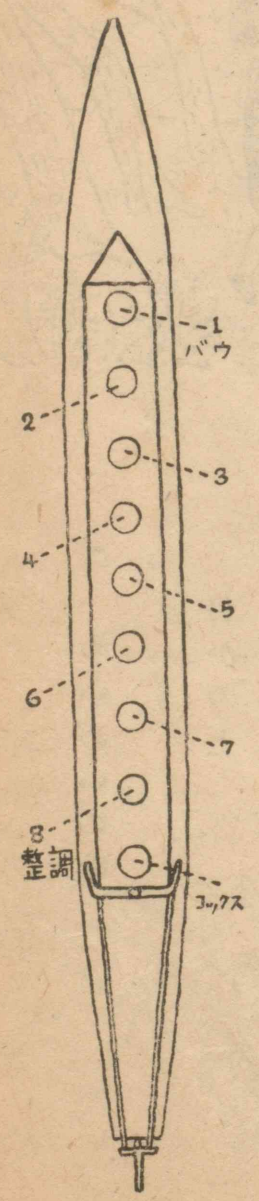
正しい方へつれていくのさ。」

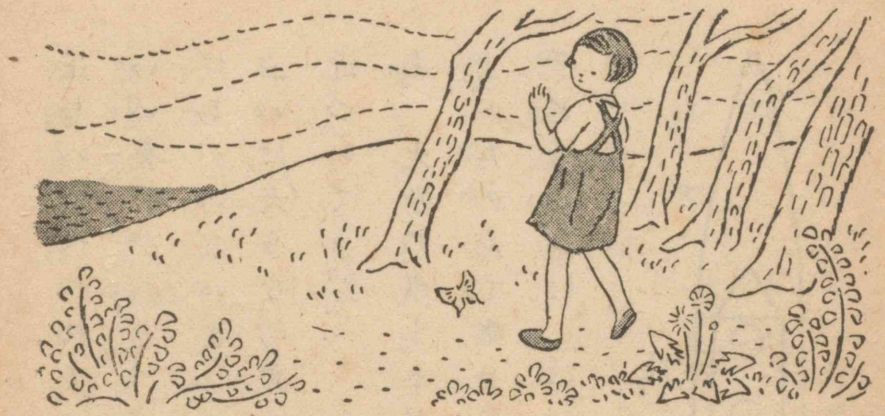
「いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれる
にちがいないよ。」

ふいに大きな、勇ましいかけ声が聞えて、一そりのボートが
近づいてきた。

あ、大学のボートだ、このあいだのレースで勝ったボートだ
よ。たのんで乗せてもらおう。」

子どもたちは、いっさんにボートの方へかけていった。



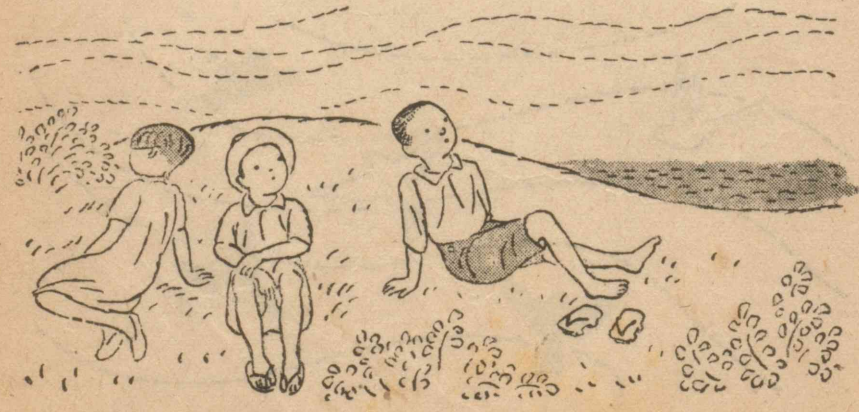


二 めいめいの歌

おかの上

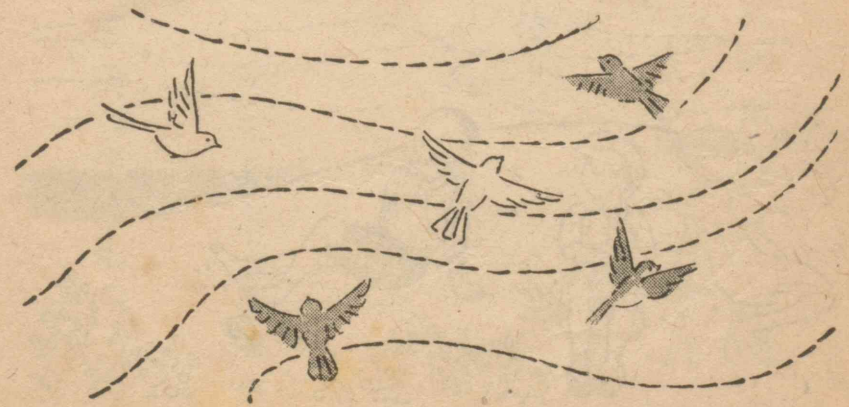
春がさつて夏がくる。
 たんぼぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。
 あげはのちようが、まつのかげからまつ
 てでる。
 まつの木では、きようからせみが鳴きは
 じめた。
 まつさおな海は、太陽の下でわらつてい
 る。

休みもなく、はてしもなく、ゆるやかに
 にうつ波の声は、
 われわれの心をあらうようにきこえる。
 おりから、港の方でふえが鳴る。
 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。
 ああ、われわれみんな、
 遠い國から旅してきた旅人のような氣
 持のする日だ。
 おかの上の草にすわつて、
 いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよ
 う。
 あれば、あわてもののほおじろだ、



あれは、元氣もののこがらだ。
あれは、この村のさみしがりやの小す
ずめだ。
小鳥たちはみんなめいめいの歌を歌う、
一つの太陽の下で、
みんながめいめいの歌を歌っている。
一つの太陽の下で、
せみも鳴き、ちようもまい、
まっさおな海もわらい、
たんぼぼのわた毛も遠くとんでいく。

唱歌



先生がオルガンをおひきになると、
オルガンのキイから、
赤い、
青い、
金色の、
ちがった形の小鳥が、
はばたいてでて、
くるくる、くるくる、
ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。
教室の高いところのまどガラスが、一まいこわれていて、
やがて、小鳥たちは、
そこから遠い空へにげていった。

おかあさま

人の心の**畑**にさいた、いちばん**美**し
い花

天と地にかがやくものの中で、
いちばん**清**らかな、すみきったたま、
それはおかあさまの**愛**です。

わたしをまもるためには、
どんなこんなにも**戦**う、そのうで。
ひくく、かほそい、**お**さな子の**さ**さ
やきも。



ききもらさない、その**耳**。

わたしのためには、
いばらの**道**をもふみわけたその足。
いま、わたしが**知**っているいいことと、
正しいことは、

おかあさま、
あなたの**目**から**教**えられました。
おかあさまのむねに、
わきあふれるなぐさめのいずみに、
かなしみもいたみも、
あとなくぬぐわれます。
朝も、**晝**も、**夜**も。

流れやまぬ愛のしみずに、
うるおされ、やしなわれて
のびていく命のわか葉。

わたしの幸福は、
おかあさまの笑顔から生まれます。

三 二宮金次郎

これから、私の調べた二宮金次郎のことをお話します。

二宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣のかやま村といつて、さかわ川にそった村です。

この村に、ぎんえもんという人がいました。働くことが好きで、一代でりっぱな身代をこしらえました。

その子どもに、りえもんという人がありましたが、たいへん情ぶかい人でした。村の人たちがこまっていたのみにくると、氣持よく、物をわけてやったり、お金をかしてやったりしました。この人が金次郎の父親でした。

りえもんは、からだがよわくて、よく働けませんでした。そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、いつのまにかびんぼうになって、その日のくらしにもこまるようになりました。しかし、りえもんは、なんとかして、

からだをじょうぶにして、身代みんがひをもとのようにしたいものだ、
ほねをおつていました。

そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。だから、金
次郎は、子どものとき

から、家の手つたいを
してよく働きました。

また、父親のすきなも
のをか買うために、自分
でわらじを作って、お
金をもうけたりもしま
した。



金次郎が十二のころです。さかわ川のていぼう工事いさぼうがあつて、

どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くと
どになりました。

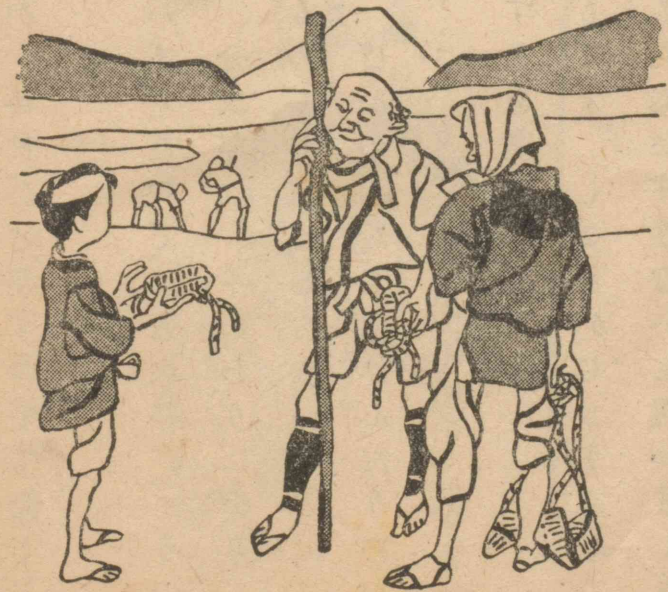
そのとき、父親が病氣でねていましたので、金次郎が、その
かわりにでることになりました。金次郎は、年のわりからだ
が大きかったし、働きつけているので、役にたたないことはあ
りませんでした。それどころか、ほかの人たちは休んだりむだ
話をしているのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、かえっ
て、おとなよりもよけいに土やすなを運ぶほどでした。

しかし、なんといいっても子どもです。しごとがじゆうぶんて
きないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。
そこで、金次郎はいいことを考えつきました。

毎ばん、家に帰ってくる、晝まの働きてつかれきっていないが

ら、わらをたたいてわらじを作ることになりました。これを持って、朝早く工事場へいきました。たくさんの人の中には、わらじの切れている人もあります。金次郎はわらじをさしだしていいました。

「おじさん、これをはいてください。わたしがみなさんのお役にたたないで、すみません。どうかそのかわりにはいてください。」
おとなの入たちはおどろいて、すぐには受けてくれませ



んでしたが、おしまいには、喜んではいてくれました。

金次郎が十四のとき、父親がなくなりました。金次郎の下にふたりの弟がありました。いちばん下のは、そのとき二つでした。どんなに病気がちでも、父親の生きているあいだは、みんなはげましあつて、どうにかこうにか切りぬけてきました。が、いまはどうにもなりません。

母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類いんづいにもらってもらいました。

「ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅうぶん働けますよ。元氣よくいった母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねむれません。」
「どうしたのです。おかあさん。」

「おちちがはってこまるの。二三日したらなおると思うけれど。」
「おかあさん、とみちゃんを返してもらいまじょう。ひとりぐ
らい育てるお金は、わたしが山へ行って木を切ってきてもう
けますよ。」

金次郎は、自分の考えをくり
返し話して、母親にすすめました。

「そんなら、今夜こんやいって、返し
てもらってきましよう。」

母親は、金次郎が、「もうおそ
いから。」というのに、そのばん
のうちについて、子どもをつれ
てきました。そうして、



「どんなことがあっても、親子四人、わかれないうちにしましよ
うね。」

と、いいあいました。

そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうち
からおきて、遠い山へ行って、しばをかったり木を切ったりし
て、村の人に買ってもらいました。そのお金は多くはありませ
んでしたが、四人が生きていくにはじゅうぶんでした。

夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしまし
た。ふつうの子どもだったら、くたくたになってたおれるとこ
ろを、金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、かえって、
その体格ていかくもりっぱになっ*て*いきました。

金次郎は、一さつの本をみつめました。それは「大学」といって、

かん文ぶん
で書い
たむず
かしい
本でし
た。そ



の一まいめをめぐって、くり返しくり返し読んでみると、りっ
ばな人になるためには、学問がくもんをしなくてはならないと書いてあ
りました。

金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がし
たくなりました。まきをとり山へいく、そのいき帰りに、い
つもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読み

ながら歩きました。

「あの子は、どうかしているのではないだろうか。」

村の人たちは、こう、うわさをしましたが、金次郎は耳にも
いれず、それを続けました。

お正月がくると、例年れいねんのことで、だいかぐらがまわってきま
した。たいこをたたいて、家から家へやってきます。どこの家
でも、百文ひゃくもんだして、おもしろいまいをまわせましたが、まわせ
ない家でも、十二文じふにもんあたえるのがならわしでした。金次郎のう
ちでは、その十二文さえありませんでした。けれども、そんな
わずかな金がないということはいえませんが、母親と相談して、
戸とをしめきって、息をこらして、だれもないふうをしていま
した。金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。

ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病氣で死んでしまいました。おまけに、さかわ川がまたあふれて、のこつていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。このとき、金次郎はたった十六でした。

そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。

いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、そこへいってからは、いよいよいっしょうけんめいに働きました。そのうえ、夜おそくこつそりと勉強を続けました。

夜の勉強には油がいらいます。その油を自分でとりたいと思ひ、となりのおばさんから一にぎりのあぶらな種をかりて、かわらへいって、あき地にまいておきました。あくる年の春、黄色

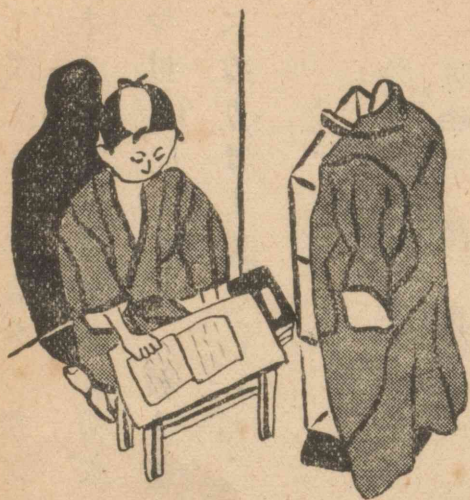
い花がさいて、たくさんの実がつかしました。これを油にかえて、本を読み続けました。

金次郎は、また、人がすてておいたいねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。すると、秋の

終りには、一びょうあまりの米を自分のものにするのができました。

この一びょうをもとにして、こまっ
ている人にかしてやったり、植える
ところをふやしていったりするうち
に、三年めには、二十びょうの米を
とることができました。

やがて、金次郎は、親類の家から



でて、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことがで
きました。そればかりではありません。いろいろのことを身に
つけて、やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるよう
になりました。

四 田 園

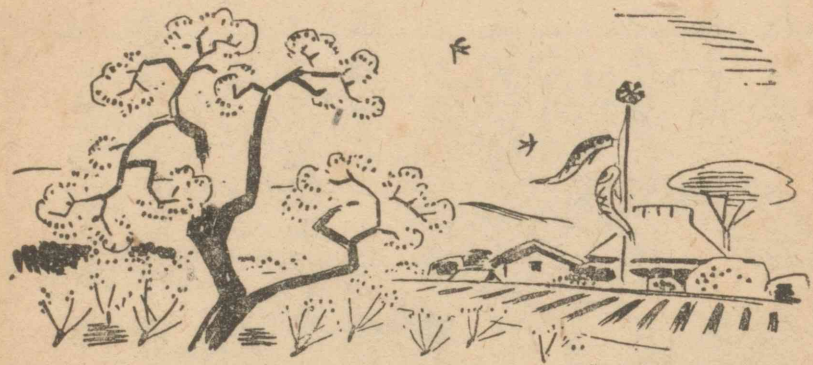
春

こうばい・はくばいみなちりはてて、
ひがすすぎれば風あたたかく、

木々のつぼみも草のめも、
日々に色づきふとりだす。

続くひよりにさくらがさいて、
野山をかざると、もも赤く
畑にさいて、れんぎょうは、
かきねを黄色にそめていく。

青い空にはかすみがかめて、
ひばりは朝から大うかれ、
えんどう・そらまめみな花つけて、
はね音高くみつばちがとぶ。



かきのわか葉に日の照るころは、
やぐるまからからこいのぼり、
村のわら屋の庭に立つ。

短か夜しらむを待ちかねて、
だいこんの花にあかつきの
色ただよえば勇ましく、
すき・くわ持って野にいそぐ。

夏

ほたる追う夜も重なって、

しとしととふる春雨に、
やぶのたけのこすくすくのびて、
しずくすおうとでてむしが、
つのをふりあげのぼりだす。

岸のやなぎのほわたがとんで、
麦のはしりほかがやく上を、
海こえてきたつばくろが、
すうい、すういとびまわる。

げんげがさいいて、
なの花ちって、





ふくすず風に夕はん樂し。
 空にくずれる雲のみね、
 庭にかがやくひまわりの花、
 あぶらせみの声さわがしく、
 晝の休みもあせがてる。
 まばゆく光るいなずまに、
 続いてひびくらの音。
 たきと落ちくる大ゆうだちに、
 いまの暑さはどこへやら。

麦のとりいれことなくすめば、
 はい色雲が空うちおおい、
 青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。
 さなえ運ぶ子、うし追うおきな、
 家内そろって田植えする。
 きのうの畑は水田となつて、
 ばんにはかえるが歌いだす。
 つゆ晴れ空はみどりにすんで、
 日ましに日ざしが強くなり、
 いねは育つし、あせまめのびて、



くわをかついで田をみまわれれば、
日はまた照って水たつぷりと、
いねのかぶりこのうえもなく、
秋のみのりも思われる。

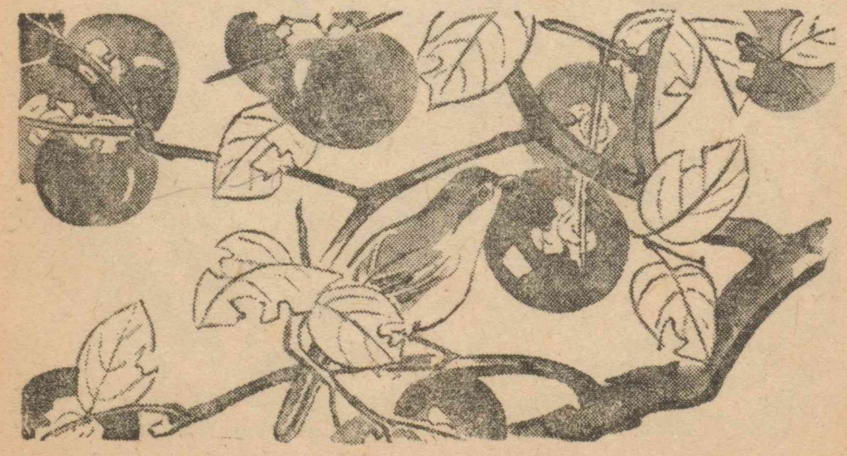
ひと日のあせもおさまって、
夕風ふけばたいこ鳴り、
滑い歌声あちこちと、
こよい楽しいほんおどり。

秋

はぎの花ふく朝風も、
音さえすすしくなってきた。
さやまめ・とうきびよくみのり
いももふとつてくるようす。

あまがき・しぶがき赤くなり、
くりもばらばら落ちだした。
こずえをかけるもずの音も、
すむ秋空によくひびく。

あぜに火とさくまんじゆしゃげ
庭にもえたつはげいとう。



続くひよりに勇みたち、
いねもことなくとり入れた。

きようはうれしい豊年まつり。

村道に立つ大のぼり、

ゆききの人もえ顔して、

その足どりもいそいそと。

かきねににおうきんもくせい、

しとしとふる秋雨に、

ちれば山にはまつたけが、

かおりも高くはえてくる。

かえてにうるし、はじの葉も、

赤く黄色く色づいて、

冬のしたくをとりいそぐ

村人の目をなぐさめる。

おおもむぎ・こむぎの種まきすんで、

そらまめ・えんどうみなまいた。

冬の用意もしだいに進み、

あとはもみすりするばかり。

冬





山のもみじ葉みなちりはてて、
青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。
夕ぐれ寒くふくこがらしは、
黄色くかれたくぬぎ葉鳴らす。

南にかたむく日につれて、
光はまともにえんにさす。
ほしたかぼちやは赤やら黄やら、
にわとりどもはひなたぼこ。

はい色雲がたちこめて、

さとはしぐれがしとしとふるに、
ふもとの小屋はみぞれして、
うらの山には白雪つもる。

もちつきすませて、しめなわをはり、
一夜明ければうれしいはつ日。
廣場につどうたおとなりどうし、
え顔にほころびあいさつをする。

池にむすぶはうすごおり、
庭に立ったはしも柱。
学校へいそぐ子どもらの、

息はま白にまいのぼる。

よべの大雪まだふりやまぬ。

もうそうちくも重荷にたえず、

つばきの上にぼたぼた落す。

ことしも作はよいだらう。

ふきのとうでて、すいせんにおい、

うめもほころび、こちふけば、

春も目さきに近づいた。

どれ植えつけの用意をしよう。



五 新しい出発

やりなおし

ようち園の卒業式がありました。

弟が卒業するので、私が、母にかわってでました。

正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびん
がかざってありました。

ようち園の子どもたちは、そのまえにおとなしくこしかけて
います。

園長さんが、だんの上にお立ちになりました。

女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。

「はい」「はい」「はい」

みんな元氣のいい返事をして立ちます。

それをみようど、父兄の入たちは、自分の席で立ちあがりま
す。子どもと父兄と、いっしょによばれているようです。

みんな読みあげられてから、おめんじょうをいただくことにな
りました。

総代の名が、ひときわ高くよばれました。

弟の名でした。

私は、自分がよばれたような気がしました。

弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進みました。

そうして、園長さんのまえに向いたとき、

「あ、まちがった。」

と、大声でいいました。

弟は、さっさとともとの自分の席にもどり、そこからでなおし
て進みました。

こんどはまちがいませんでした。

園長さんのまえにでて、だんをあがり、

両手をずっとさしのべて、おめんじょうをいたたいて、

ささげ持つようにしながら、席に着きました。

私はほっとしました。

そうして、弟の心持をたのもしく思いました。

すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかつた弟よ。
大ぜいの目のまえで、

「あ、まちがった。」

とさけんだ弟よ。

まちがったとき、思いきってやりなおした。その勇気をたのもしく思いました。

じゃがいもをつくりに

じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいなかを思いたす。

みわたすかぎりのじゃがいも畑のうねの向こうに、

いつもぼっかりとういていたえぞ富士。

あの山のすがたが、小さいころのことを、い



ろいろと思いださせる。

ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたのは、

ぼくの二年生のときだった。

津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

ぼくは、船のかんぱんに、おかあさんとふたりで立っていた。

北海道の家には、うしが四頭いた。

みんなちちうしで、ぼくによくなれていた。

うちではバターもつくったし、

こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

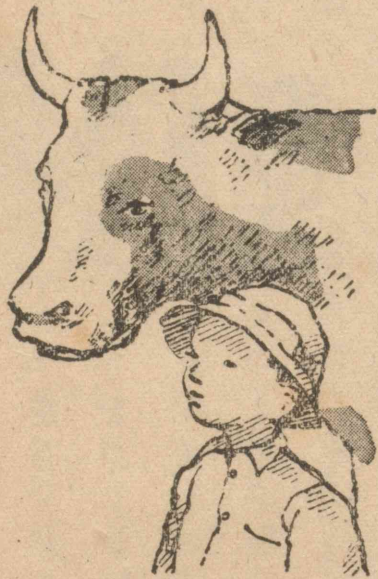
おかあさんがパンをやくそばで、

ぼくは、いつも本を読んでいた。

ぼくのいすは、小さなゆりいす
 で、
 その下に、いつもかいねこのメ
 リーがいた。
 アカシヤの花が風にゆれ、
 畑では、いちごがでさかりだっ
 た。
 おとうさん、
 ぼくは、大きくなったら、また、
 おかあさんといっしょに北海道
 へいきます。



北海道へ行って、じゃがいもをつくります。
 それから、えんばくもつくります。
 ぼくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、
 自分でバターをつくります。



やぎもかいます。
 やぎ小屋のまわりには、お
 かあさんのおすきなライラッ
 クを植えましょう。
 おとうさんに、負けな
 ように働きます。

日本のこくぐらは、北海道だといひます。



ゆうべからの大あらしは、けさになって
 もまだ続いていていた。庭のあさがおの花は、
 みんなふきちぎられ、へちまの葉は、みん
 な下向きになってしまった。
 私は、かさをさして電車の停留所までで
 かけた。しかし、風がはげしいので、すぐ
 かさをつぼめてしまった。雨にうたれなが
 ら、電車のくるのを待っていた。電車は、
 くるにはくるが、みな満員のふたをさげて、

六 雨の中



さつぽろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしゃった。
 「青年よ、大きな望みをもて。」
 ぼくは、大きくなったら、どうしても北海道へいこうと思う。
 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。
 おかあさんをおつれして。
 デンマルクの農業のことを勉強して、
 ぼくは、いい農夫になろう。

とまらずに走って行ってしまふ。

やっと一台の電車がとまった。あふれそうな乗客にまじって、どうやら乗車口へもぐりこむことができた。車内はむし暑い。えに、おたがいがぬれたからだで、おしたりおされたりしなければならなかった。

だれかのかさのしずくが、私のくつの上にはたばたと落ちてきたりした。けれども、その足も動かすことはできなかつた。

電車は、歯ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。一停留所ごとに、おりる人と乗る人ともみくちやになった。しゃしゅうさんは、

「あんまり乗らないでください、満員ですから。」と、声をかけた。

「そんなにぶらさがっちゃ、電車は動けませんよ。」とさげんだ。

大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。乗客はおたがいにおしあつて、しゃしゅう台までいっぱいになってしまった。そのとき、しゃしゅうさんは、

「電車もなみだをこぼしています。そんなにおさないでください。」

い。

といった。

そのことばをきいて、そこらの乗客は思わずほおえんだ。いまままで、ひどくとげとげした心でおしあつていた人たちも、きゆうになごやかな氣持になった。

このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかかけられて
いるのをみた。

「入口ふさがず乗ったら中へ。」

「え顔の入口、感謝の出口。」

「つり皮あけずに中ほどへ。」

「おたがいに つめて、座席にもうひとり。」

「ゆずられたときの氣持でゆずりましょう。」

どれもみなうまいことばだ。けれども、私は、「電車もなみだ
をこぼしていません。」といった、しゃしやうさんのことばをわす
れることができない。

七 一つ一つつづる

ことばははねる、

つまめばにげる。

てんとうむしのように、

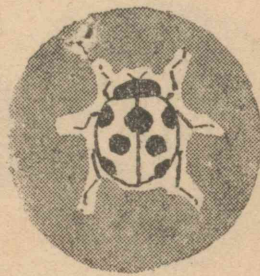
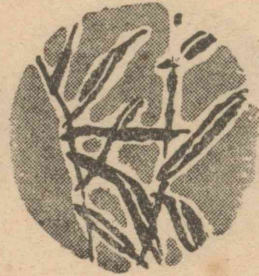
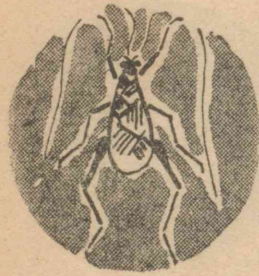
みずすましのよう、

一つ一つはねる。

ことばはひびく、

あしの葉のふえよ。

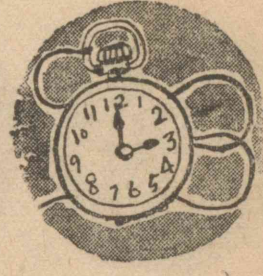
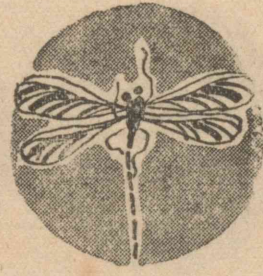
すずむし、小むし、





ことばをつらら。
 じゆずだま・むくろんじ、
 赤い、赤いつばき、

めやぎのおちち、
 一つ一つかおる。
 ことばはしみる。
 はちみつやいちご、
 青うめ・わさび、
 にかい、にかいくすり、
 一つ一つしみる。



チツクタツク時計、
 一つ一つひびく。
 ことばは光る、
 ブリズムのかげよ。
 花火やほたる、
 とんぼの目だま、
 一つ一つ光る。
 ことばはかおる。
 べにばら野ばら、
 さんしよの木のめ、

げんげの花わ、
一つ一つつづろ。

ハ いいにくいことば

「ナナムギ、ナガゴメ、ナガタマゴ。」

「ナナムギ、ナマモメ、ナマタマゴ。」

いくどもくり返しているうちに、太郎は、

「なまむぎ、なまごめ、なまたまご。」

と、早口にすらすらといえるようになった。

太郎は得意になって、

「おとうさん、こんないにくいことばは、

ほかにないでしょう。」

というど、父はにこにこわらいながら、

「おとうさんは、もっといいにくいことばを知っているよ。」

と答えた。

「なんということばですか。」

「はい」ということばと、「いいえ」ということばだ。

「はい」「いいえ」、やさしいことばではありませんか。」

「やさしいようだが、なかなかいいにくいことばだよ。」

あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれて、学校

から帰るときのことであった。

「本道は遠いから、近道をしよう。」

と、正男がいうと、一雄はすぐ賛成した。その近道というのは、



田のあぜ道で、とちゅうに、かなり深い小川にかけわたした一本橋がある。太郎は、まえから父に、「あの橋はあぶないから、けつしてわたつてはいけない。」とかたくとめられていたのである。が、いま友だちからすすめられて、ことわりかねてしまった。そうして、いっしょにその一本橋をわたりました。すると、橋はまん中からおれて、三人は川の中



へドブんと落ちこんだ。さいわい近くの田で働いていた村の人たちに助けられて、みんな、ぬれねずみのようになって家に帰った。

父は、

「おまえはどうしたのだ。まえからあぶないといっておいた、

あの橋をわたつたのではないかね。」

とたずねた。しかし、太郎はだまっていた。

その夜、また父にきびしくただされて、太郎は、やっときよ

うのことを、ありのままにうちあげた。

父は、

「なぜ、そのとき、『ぼくは、とめられてゐるからわたらない。』と、きっぱりことわらなかつたのか。」

とせめた。

「はじめ、ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。ぼくはくやしくなったので、なに、このくらいのことがかわいものかと、自分からさきになってわたってしまったのです。なるほど、よわ虫だ。人のいうことに『いいえ』といきるには、ほんとうの勇氣がいる。おまえのようなよわ虫には、ひよつとすると命を失うようなあぶないときでも、いいだすことのできないほど、『いいえ』ということばはいいにくいのだ。それから、また、このことをたずねたとき、なぜすなおに『はい』といわなかったのだね。」

「なんだか氣まりがわるくて、そういえなかったのです。」

「それ、ごらん。『はい』も『いい』にくいことばではないか。」

九 父のかん病

(一)



雨のふっている三月のある朝、いなかの人らしいひとりの少年が、どろまみれにくっしよりとぬれて、わきの下に着物の包みをかかえながら、ナボリの大きな病院の門ばんのまえへ行って、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、考えぶかそうな目をしていました。

少年は、ナボリの近くにある村からきたのでした。少年の父親というのは、去年、しごとをさがしにフランスへいったので

すが、数日まえ、イタリアへ帰ってきて、ナポリに上陸しました。ところが、にわかには病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。母親は、その知らせをみるとがっかりしましたが、自分はちのみ子もあつて、家をあけることができなないので、長男にいくらかのお金を持たせ、父親のかん病のために、ナポリへよこしたのでした。



門ばんは、その手紙をひと目みてから、かんご人をよんで、少年をその父親のところへつれていくようにといたしました。

「おとうさんの名はなんといいの。」
と、かんご人がききました。

少年は、もしやわるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにふるえながら、その名をいいました。しかしかんご人は、そういう名を思ひだせませんでした。

「年よりのでかせぎ人ですか、外國から帰ってきた——」
と、かんご人がききました。

「そうです。でかせぎ人です。」

と、少年は、ますます不安をおぼえながら答えました。

「そんなに年よりではないのですが、外國から帰ってきたので

す。

「いつ入院したのですか。」

「五日ほどまえだと思えます。」

かんご人は、しばらく考えていましたが、ふと思いだしたように、

「じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。」

といました。

「たいへんわるいのでしょうか。どうなんでしょうか。」

と、少年は心配そうにききました。

かんご人は、少年をながめて、それには答えないうで、ただ、

「わたしについておいで。」

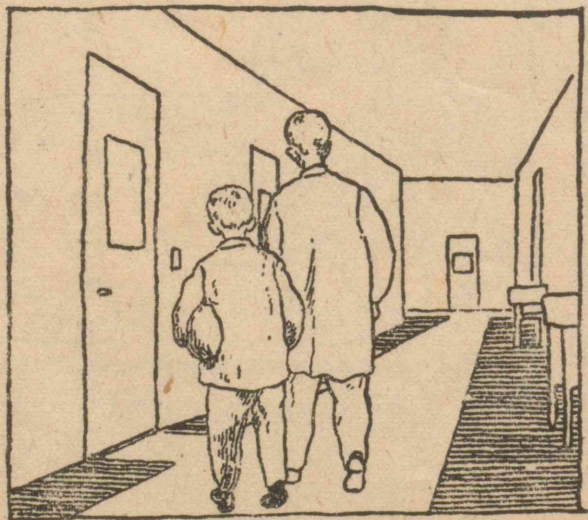
といったただけでした。

ふたりは、はしごだんをのぼって、長いらうかのはずれまで歩いていきました。そうして、大きなへやの、開いたドアのまえまできますと、その中にはベッドが二列にならんでいました。

「おいで。」

と、かんご人は、くり返しながら、中へはいりました。

少年は、勇氣をふるいおこして、その後からついていきながら、おどおどした目を右に左に向けて、青ざめた、やせこけた顔をしている病人たちをみまわしました。



中には、死人のようにみえる者もあれば、びっくりでもしたように、大きくみ開いた目をあけて、じっと空間をみつめている者もありました。また、子どものようにうなっている者もありました。大きなへやはうす暗く、あたりにははげしいくすりのにおいがただよっていました。かんごふがふたり、手にくすりびんを持って、へやを歩きまわっていました。

その大きなへやのはしまでいくと、かんご人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、カーテンをあけて、

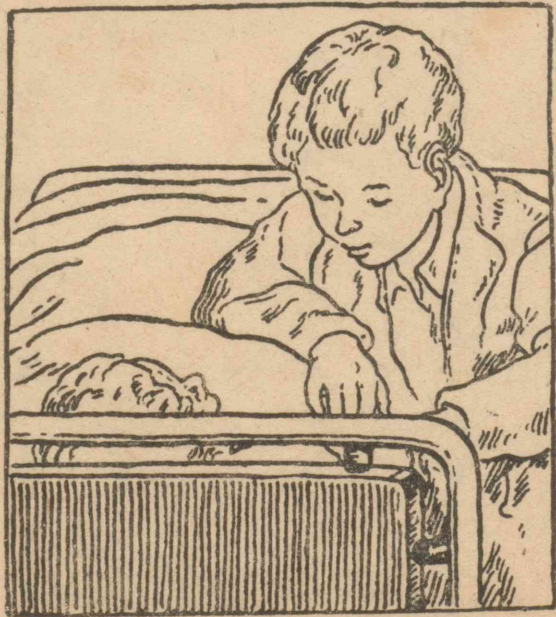
「これが、きみのおとうさんですよ。」
といました。

(三)

少年は包みを下におくと、頭を病人のかたのところへさげて、一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。病人は動きませんでした。

少年は、身をおこして父親の方をみました。すると、かなしくなつてなきだしました。病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかったようでしたが、くちびるは動きませんでした。

せんでした。こうもかわればかわるものか——これが父親であろうとは、とても思われませんでした。かみの毛は白くなり、



ひげはのび、顔ははれあがってどんより赤く、ひふははち切れ
そうになっていました。ただ、ひたいとゆみ形をしたまゆどの
ほかには、どこかといって父親らしいところはありませんでした。
息をつくのもやっつどのようでした。

「おとうさん、おとうさん。」

と、少年はいいました。

「ぼくですよ。わかりませんか。チチロですよ。チチロがいな
かからでてきたんですよ。おかあさんがよこしたんです。よ
くみてください。ぼくがわかりませんか。なんとかひとこと
いつてください。」

けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を
とじました。

「おとうさん、おとうさん。いったい、どうしたんですか。ぼ
くは、おとうさんの子どもですよ。おとうさんの子どものチ
チロですよ。」

病人は、身動きもしないで、苦しそうに息を続けていました。
少年は、いすをひきよせて、目を父親の顔からはなさないで、
こしをおろして待っていました。

「いまに、お医者さんがみにきてくださるだろう。」

と、少年は考えました。

「そうすれば、おとうさんのようすもなんとかわかるだろう。」
少年は、かなしい思いにしみながら、やさしい父親のこと
をいろいろと思い返していました。

去年、みおくって、最後に船の上でわかれを告げたこ

とや、家族の者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど——それからそれへと、いろいろ考えました。そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわったので、びっくりしてとびあがりしました。それはかんごふでした。

「ぼくの父はどうしたんでしょう。」

と、少年は口早にききました。

「このかた、あなたのおとうさんですか。」

と、かんごふはやさしくいいました。

「そうです。それでぼくがきたのですが、どこがわるいのでしょう。」

「心配しないでいらっしゃい。先生が、いまじきにおいでにな

りますからね。」

かんごふは、ほかにはなんにもいわずにいってしまいました。半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにはいつてきました。さっきのかんごふと、もうひとりのかんご人どがついていました。

その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。待っているそのあいだが、少年にはたいていへん長く思われました。医者がすぐそばのベッドまできました。医者は、せいの高い、すこしかがんだ、まじめな顔をした老人でした。医者が、まだとなりのベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

医者は少年をみました。

「このかたは、この病人のむすこさんです。きょう、いなかからきたのでございます。」

と、かんごふがいました。

医者は、手を少年のかたにか
けました。それから、病人の上
にかがんで、みやくをみたり、
ひたいにさわってみたりして、
そうして、二こと三ことかんご
ふにたずねました。

「べつにかわりはございません。」

と、かんごふは答えました。すると、医者はちよつと考えてか



ら、こういいました。

「いままでどおりのてあてを続けなさい。」

そのとき、少年は、勇氣をふるいおこしてたずねました。

「ぼくの父はどうしたのてしょう。」

「心配しないでおいで。」

と、医者は、もう一ど少年のかたに手をかけながら答えました。

「たんどくが顔にでたのです。だいぶんわるいけれど、まだ望
みがある。氣をつけておあげなさい。きみがいれば、きつと
よくなるから。」

「けれど、ぼくってことがわからななんです。」

「どうかよくしたいものだ。力をおとさずにいるがいいよ。」

少年は、もつとなにかききたかったが、いえませんでした。

医者はいつてしまいました。そこで、少年はかん病にかかりました。が、ほかになにといつてすることもできませんでしたから、病人のふとんをなおしたり、ときどきその手にさわってみたり、はいを追つたり、うなるたびごとにかがんでみたり、そうして、かんごふがなにか飲み物を持ってくると、コップなりさじなりをその手から取つて、かんごふにかわつてそれを飲ませたりしました。病人は、ときどき少年の方をみましたが、わかつたようなようすはしませんでした。でも、ハンカチを目にあてているときには、じつとみつめていました。こうして第一日はすぎました。

夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

そうして、朝になると、またかん病をはじめました。その日は、病人の目つきが、いくらかわかりかけでもしたようにみえました。少年のいたわるような声のひびきをきくと、感謝するような色が、そのひとみに、ちよつどのあいだうかぶようにみえました。そうして、なにかいおうとでもするように、すこしくちびるを動かしました。

ちよいちよいとねむつたあとでは、目を開いたときに、その小さなかんご人をさがすようにみえました。医者は、二どきていくらかよくなったように思うといいました。夕がた、コップを病人の口もとにつけたときに、少年はそのふくれあがった顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのをみたような気がしました。そこで、少年は、自分をなぐさめて望みをかけ

はじめました。少なくとも、いくらかわかるであろうと思うと、いろいろのことを――母親のことや、妹たちのことや、父親の帰りを待ちこがれていたことなどを――それからそれへと長々と話しかけて、そうして、あたたかい愛情のこもったことばで、しっかりするようにと病人を上げました。たとえわからなかつたとしても、病人がなんだかうれしそうにその話す声に――愛情とかなしみとのまじりあつた、しみじみとしたそのちようしに、じつと耳をかたむけているようにみえたからです。

そうして、二日めも、三日めも、四日めもすぎました。すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなつたりで、少年はかん病にいつしようけんめいになつていました。一日に二ど、かんごふが持つてきてくれる、すこしばかりのパンとチ

ーズも、ほとんどたべませんでした。

少年は、父親のちよつとしたため息にも、ちよつとした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、心を休めるような希望と、むねをこおらせるような失望とのあいだで、たえずはらはらしていました。

ところが、五日めに、病人はにわかになるくなりました。医者、まったくだめだといわんばかりに頭をふりました。少年は、いすにぐったりと身を落して、すすりなきしました。が、ただ一つ、少年をなぐさめ



ることがありました。それは、ようだいがわるくなつたにもか
かわらず、病人が、しだいに、すこしずつものがわかりかける
ようにみえたことです。病人は、だんだんしっかりした目を少
年の上にすえて、うれしそうな色を顔にうかべながら、飲み物
やくすりを、少年の手からでなければ飲まないようになりまし
た。また、なにかものをいおうとでもしているように、いくど
もいくども、むりにくちびるを動かそうとしました。それが、
ときにはいかにもはつきりとなりましたので、少年は希望に力づ
けられながら、いきなり病人のうでをつかんで、

「おとうさん、しっかりするんですよ。しっかりするんですよ。
もうすこしのあいだですから。」
と、いつて力づけました。

(三)

その日の午後四時ごろでした。ちょうど、少年がそういうは
かない希望をもつて、いつしんにかんごしていたときでした。
そのへやのすぐそばの、ドアのそとに足音がきこえて、やがて、
「さようなら、かんごふさん。」という声がきこえました。少年は、
思わずはつとどびあがりました。のどまででかけたさけびを、
じつとおさえながら、

みると、一方の手にあつくほうたいをしたひとりの男が、か
んごふに送られながら、そのへやにはいつてきました。

少年は、するどいさけびをあげて、その場に立ちすくみまし
た。男はみまわして、ひと目少年をみると、こんどはかれがさ

けびを發しました。

「チチロ。」

男はそういって、少年の方へとんできました。

少年は、父親のうでの中にたおれましたが、むねがせまつて息もつけませんでした。

かんごふや、かんご人や、

助手がかけよつてきました。

少年は、まだ声をだすことができませんでした。

「おお、チチロ。」

と、父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にほおずりしてからいきました。

「チチロ、これはいったいどうしたのだ。おまえはべつの人のところへつれていかれたのだな。わたしはまた、おかあさんから、「チチロをやりました。」って手紙がきたきり、おまえがこないから、どんなにがっかりしていたかわからないよ。これ、チチロ、いく日おまえはここにいたのだね。どうしてこんなまちがいがおこつたのだらう。わたしは、これこのとおり、すっかりじょうぶになったよ。それで、おかあさんはどうしているの。それから、コンセテラは、それから、あかんぼうは——みんなどうしている。わたしは、いま退院するところだ。さあ、いこう。まあ、ほんとうに思いがけないこともあ



るものだ。

少年は二こと三ことばをはきんで、家族のようすを話そうとしましたが、

「ほんとうに、ぼく、うれしい。」

とだけ、やっといいました。

「さあ、いこう。ばんには家に着けるから。」

父親は、少年を自分の方へひっぱりました。

少年はふり返って、病人の方をみました。

「さあ、いくのか、いかないのかね。」

と、父親はあきれうながしました。

少年は、また、病人の方をながめました。病人は、そのとき、

目を開いて、じっと少年をみつめました。

すると、少年のたましいのそこから、どつことばがほとばしりてきました。

「いいえ、おとうさん。待ってください。ぼく、いけないます。ここにあのおじさんがいます。ぼく、ここに五日のあいだいました。おじさんは、いつでもぼくをみています。ぼく、あの人におくすりを飲ませてあげるので、いつも、ぼくがそばにいないといけななのです。あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。ぼく、とても思ひきれないんです。ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいさせてください。ほら、あんなにぼくをみています。どうか、ここにいさせてください。ねえ、おとうさん。」

父親は、じっと少年をみつめていましたが、やがてまた、病

人の方をみました。

「だれですか、あの人はい

と、父親はたずねました。

「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」

と、かんご人が答えました。

「やはり外国から帰ったばかりで、ちょうどあなたが入院した
と同じ日に、入院したんです。ここへつれてきたときには、
もうすっかりわけがわからなくなっていて、口もきけなかつ
たのですよ。たぶん、遠いところに家族があるのでしよう。
どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがい
るらしく、自分のむすこだと思ひこんでいるようですよ。
病人は、やはりじつと少年の方をみていました。」

父親はチチロにいました。

「じゃあ、ここに置いて。」

「もういくらもいなくてもいいでしょう。」

と、また、かんご人が小声でいきました。

「わたしは、これからすぐにうちへ帰って、おかあさんを安心
させてあげよう。じゃあ、ここに二円だけ置いていくから、
こづかいにきなさい。さようなら。じきまたあえるね。」
父親はそういつててていきました。

(四)

少年がベッドのそばのもとの場所に帰ると、病人はほっとし
たようにみえました。で、チチロはまたかんごをはじめました。

その熱心とそのしんぼう強さとは、まえとすこしもかわりませ
んでした。チチ口はまた、病人に飲み物を飲ませたり、ふとん
をなおしたり、手をさすったり、やさしく話しかけたり、しつ
かりするようにはげましたりしました。その日もそのばんも、
ずっとつきそっていました。そのつぎの日も、一日ずっとそば
にいました。しかし、病人はますますわるくなるばかりでした。
顔はむらさき色になり、こきゅうはいよいよこんなんになりま
した。夕がたの回しんのときに、医者は、「今夜はもうだめかも
しれない。」といいました。そこで、チチ口は、いよいよよくせ
わをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。
病人はしげしげと少年をみつめながら、ときどきむりにくちび
るを動かして、なにかものをいいたげにしました。また、やさ

しい色はその目にうかぶこともありませんでしたが、それも、だんだ
ん小さく、しだいに暗くなっていきました。

そのばん、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもつて
いました。あかつきの光がまどから白くさしこんできたとき、

医者が、かんごふとかんご人をつれてはいつてきました。

「いよいよりんじゅうだ。」

と、医者はいいました。

少年は病人の手をにぎりました。病人は、目を開いて少年を
じっとみて、そうして、また目をどじました。

そのとき、少年は、病人が自分の手をにぎりしめたような氣
がしました。

「ぼくの手をにぎった。」

と、少年はさけびました。

医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、やがてからだをまっすぐに立てました。かんどぶが十字かぞうをかべからはずしました。

「死んでしまった。」

と、少年はさけびました。

「さあ、お帰り。」

と、医者はいいました。

「きみのかん病はすんだ。帰ってしあわせにおくらし。ほんとうに感心な子だ。神さまがきみをまもってくたさるだろう。さようなら。」

そのうちに、ちよつとわきのほうにいつていたかんどぶが、

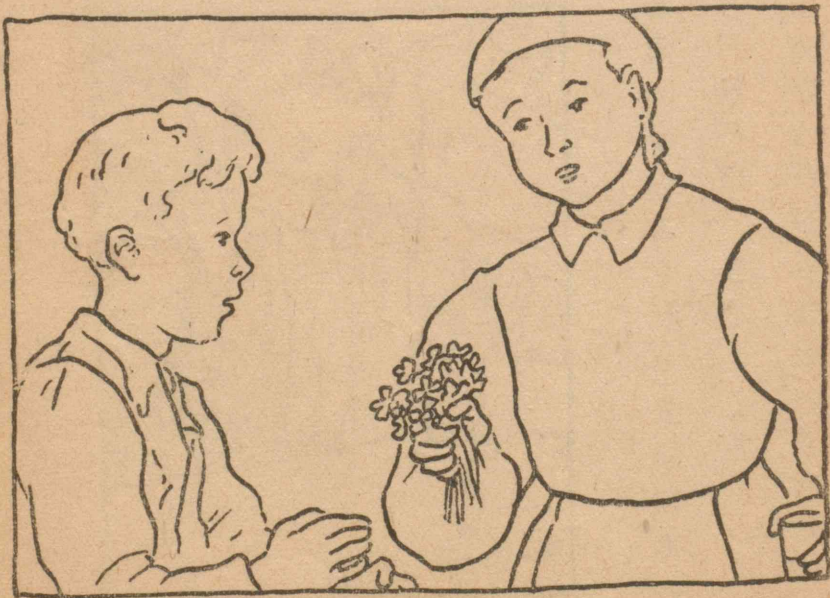
小さなすみれの花たばを、ベツドの上のコツブの中から取ってきました。そうして、それを少年にわたしながらいいました。

「ほかになにもあげるものがありません。これを病院の記念に持っていらっしやい。」

「ありがとう。」

と、少年はいつて、一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。

「だけど、ぼく、遠い道を歩い



ていくんですから、しぼんでしまいます。

そういつて、すみれをベッドの上にならしながら、

「ぼく、記念に、この死んだ人
にのこしていきます。かんご
ふさんありがとうございます。お医者さ
ん、ありがとうございます。」

そこで死人の方へ向けて、

「さようなら。」

といつて、名をなんとよぼうかと思つてゐるうち、五日のあい
だよびなれていた名が、しぜんど口にのぼつてきました。

「さようなら、おとうさん。」



そういつて、少年は、その小さな着物の包みを小わきにかか
えしました。

夜は明けかけていました。

國語 第五学年 中
 Approved by Ministry of Education
 (Date May.17, 1949)

昭和二十二年七月五日翻刻發行
 昭和二十三年四月二十五日修正翻刻發行
 昭和二十四年六月一日修正翻刻印刷
 昭和二十四年六月二十五日修正翻刻發行
 (昭和二十四年五月十七日 文部省檢査済)

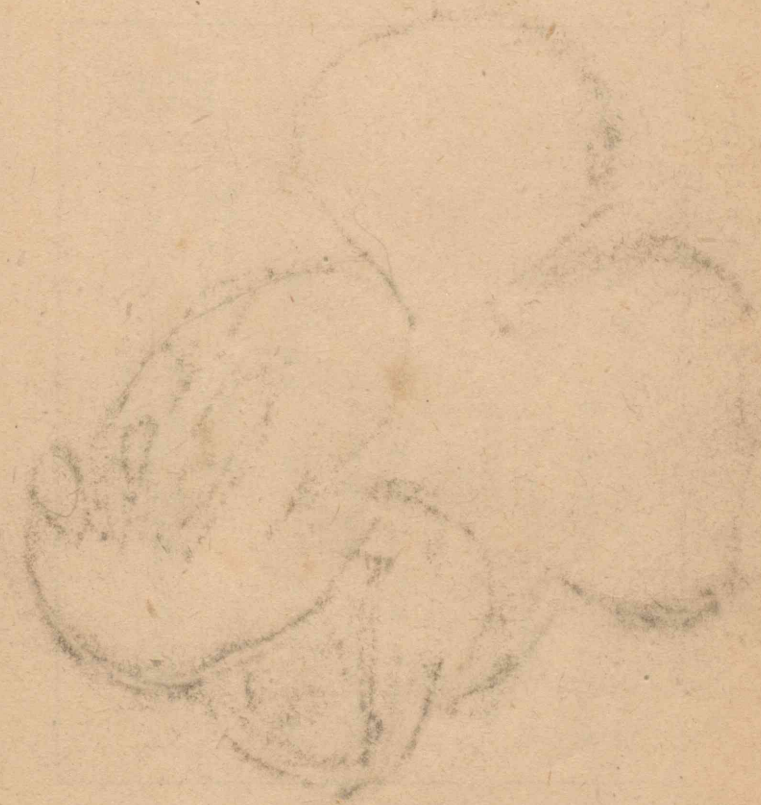
著作權所有 文 部 省

翻刻發行 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 兼印刷者 東京書籍株式會社
 代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式會社堀船工場

發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式會社

去 (63)	池 (41)	清 (16)	練 (5)
陸 (64)	総 (44)	働 (19)	習 (5)
医 (71)	留 (51)	代 (19)	賛 (5)
最 (71)	謝 (54)	続 (27)	調 (7)
希 (72)	得 (58)	照 (33)	令 (8)
退 (83)	包 (63)	豊 (38)	消 (13)



WICKY
MUST



HUMIO
KOMATU

SHOMATO